

質的データ分析試論としてのナラティブの重奏化

“Narrative Ensemble”: a Methodology of Qualitative Data Analysis

横山 草介

Sousuke Yokoyama

青山学院大学大学院社会情報学研究科

Graduate School of Social Informatics Aoyama Gakuin University

Abstract: The purpose of this study is to define what “narrative ensemble” means using the method of qualitative data analysis. Thorough the analysis based on “narrative ensemble,” the author illustrates the procedure of this methodology concretely. This methodological approach to a narrative provides meaning to one’s personal experience in the real world. If a narratives contains “the same” mutual contents unexpectedly, the methodology connecting each narrative is based upon an “unexpected coincidence,” and some additional new stories are created. The analysis of this “narrative ensemble” can be described by two different aspects of human beings: One is a description of human relationships within social interactions and the other is a description of individuals as a living storyteller. In addition, the basis of shared meanings found in “unexpected coincidence” creates the opportunity of “reweaving a relation” between some storytellers connected by experimental narratives. It also creates a relational foundation for them to be involved in the process of making sense of the new.

キーワード：ナラティブの重奏化，予期せぬ一致，関係の紡ぎ直し，経験

Keywords: narrative ensemble, unexpected coincidence, reweave a relation, experience

— 1 — はじめに

我々は日常生活を通して様々な「出来事」に遭遇する。そして後に「経験」として意味づけられることになる多様な「出来事」の脈絡の中で、我々は道具を用い、世界に働きかけ、他者と出会い、共に活動し、それらを個人的に意味づけ、あるいは他者に語ることを通して、共有し、社会的に意味づけ直していく。

我々の日常生活のある一面は、このように我々が経過する時間的連続性の中に「経験」としての意味を与える作業と、その「経験」の意味を吟味し、更新して

いく作業との連続の中にある。デューイはこのような経験の連続的特性を「経験の連続性の原理」(デューイ、2004/1938)として概念づけている。

さて、本稿では「出来事」という言葉と「経験」という言葉とを意図的に使い分けることにする。従って、ここで本稿における二つの用語について簡単な定義づけを行う。本稿でいう「出来事」とは、日常生活世界の連続的な流れの中で当人、または、当人と第三者(他者)を含む個々人が直面、ないし経過した、ある特定の時間的、空間的な場で生じた事象を指す。

これに対し「経験」は、前述の定義による何らかの「出来事」を経過した個人が、その「出来事」を自らの個人史や習慣、趣向と結びついた個別具体的な視点か

ら回顧的に意味づけ直したものを、と定義しておく。絶えず連続的な流れの中に埋め込まれている生に、何らかの「経験」という意味を与える営為は、過ぎ去った生へと向かう回顧的な注意作用を伴う（シュッツ、1980/1970）。

さて、日常の生活世界の中で経過する多様な出来事を、その場を生きた具体的な個人がどのような「経験」として意味づけるか、という問題は、先に示したように、その人の辿ってきた個人史や習慣、趣向と結びついた個別的問題として位置づくことになる。

一方で、我々の生活世界において常に「いまここ」として経過していく日常的現実には、多くの場合、様々な他者や道具を伴って経過していく。実際、我々の日常生活の中に他者や道具の存在を措定しないことは著しく困難である。ここに一つの関係的なジレンマが見出されることになる。それはもし我々が、ある出来事を巡る個別的な意味づけとしての「経験」について他者と共有し、他者との間に何らかの「合意」や「意見の一致」、換言するならば共有可能な意味や価値の土台を構築しようとするならば、時として我々は出来事についての個別的な意味づけを社会的な「合意」や「一致」のために、修正、再編し、あるいはまたその一部を放棄し、他者や共同体との間になんらかの「折り合いをつける」ことを余儀なくされる、というものである（ガーゲン、2004/1999）。

ここに示したように、ある出来事を巡る個別的な意味づけに根ざした自他の「相違」と、社会的合意への志向と結びついた自他の「一致」との間に敷かれた分水嶺は、社会構成主義的アプローチ（ガーゲン、2004/1999）における主要な探求課題の一つであると同時に、我々の社会生活において一つの関係的なジレンマを現出させる。

— 2 — 理論的問題

さて本稿では、「個的意味」と「社会的意味」との間に敷かれた関係的ジレンマを、社会構成主義的（ガーゲン、2004/1999）な視点を持ち合わせながら、これらといくらかの理論的接点を持つ文化心理学における探求の脈絡の中で検討する。本稿では特に、人間の

現実への接近を志向する方法論として提案されている二つのアプローチと重ねて検討する。ここで述べている「文化心理学」は、コール（2002/1996）、ならびにブルーナー（1999/1990）の議論によって枠づけられるもので、その源流にヴィゴツキーを主とするロシアの文化・歴史的理論学派の諸理論を引くものを指している。これに対しガーゲンの概説する「社会構成主義」（ガーゲン、2004/1999）は、ヴィゴツキー理論に依拠しているものではない。一方、ヴィゴツキーによる心理学探求が「社会的構成」を一つの主題としていた点は、理論的接点として付記しておくべきであろう。「文化心理学」は、実験的、行動科学的な心理学への批判的アプローチの一つとして位置づけられ（コール、2002/1996）、人間の認知や行為の発達に文化的な要因がどのように関係しているかを探求してきた心理学の系譜である。それまでの心理学が人間の心理の検討において人間の「内側」と「外側」とを分けて捉え、文化的要因については取り込むべき対象の一つとして考える傾向であったのに対し、文化心理学は人間の心理学の探究において「生物学や社会的相互作用と共に、文化を中核的なものとして扱う」（コール、2002/1996）試みとして展開した。さらに、心理学研究の現場を実験室場面での人々の営為から日常生活場面での人々の営為へと移していくという方法論的転換に向けて、人類学や社会学において既に展開を進めていた人々の日常生活や実践に焦点を当てる理論に依拠し、日常的な文脈の中で的人間的現実の解明に取り組んできた（コール、2002/1996）。

本稿では、こうした文化心理学の方法論的展開における二つの主要なアプローチを取り上げる。一つ目は、ブルーナー（1999/1990、2007/2002）の唱導する「文化的認知アプローチ」である。このアプローチは、ナラティブという様式が特定の文化集団における文化的な意味や、その意味生成のプロセスを吟味することを可能にするものであることを前提とし、人々の語り出すストーリーに接近することを通してその生活世界や文化的景観を個別具体的な視野から照射しようとするものである。

二つ目は、人間の社会的活動の分析単位を単体としての個人ではなく、他者や道具を含み込んだ「社会的諸関係」や「媒介された行為」（ワーチ、2004/1991）へとずらし、人々の社会的現実を三人称的な視野から

照射しようとするアプローチである。

前者のアプローチは、特定の文化実践と共に生活する人々の視野を、人々の語りだす個別具体的なナラティブの解釈によって理解可能になるものとして位置づけ、ナラティブの詳細な分析を通して人々が生活世界における意味を創り出していくプロセスを明らかにしようとする（ブルーナー、1999/1990, 2007/2002）。このアプローチに対しては、ナラティブという特有の言語様式の中に人間の実在が還元されてしまうのではないかという懐疑や、文化が常に所与のものとしてナラティブに先行していることへの懐疑が向けられることになる。

一方、後者のアプローチは、人々の日常的な活動の現実を、個人を単位として分析するのではなく、人々、コンテクスト、活動、実践、媒介物（道具）といった概念によって措定される事象を、ひと繋がりネットワークとして分析するものである（コール、2002/1996; Lave, & Wenger, 1991; Rogoff, & Lave, Eds., 1984）。行為主体と、その主体を取り巻く世界との互恵的関係に研究の焦点を当てることによって人間の現実アプローチする方略として概説することができる。これらのアプローチに対しては実践の当事者としての具体的個人が世界における自らの経験を、どのように感受し、解釈し、意味づけているか、ということへの記述を十分に検討し得ないという批判が向けられる。

ここに示した「文化心理学」における人間の現実へ向かう二つの理論的接近の脈絡では、前者においては「個別具体性」への接近を通して主観的（一人称的）に生成される社会的、文化的意味の把握が企図され、後者においては「社会的関係」への接近を通して客観的（三人称的）に個人と個人を取り巻く環境との互恵的関係を把握することが企図されたと言える。

ここに示した二つの異なる方法論的視座は、把握可能な視界の相違ということを超えて、人間の現実へ向かう方法論における二元論的なジレンマを露呈する。というのは、個別具体的なナラティブ（一人称的視野）に照準を限定するならば、連続的な時間の経過の中でその都度生じている他者との社会的、互恵的な関わり合いの実相は見落とされることになり、反対に、社会的関係（三人称的視野）に照準を限定するならば、今度は生活世界における人々の主観的な意味づけの位相

が見落とされることになりかねないからである。従って、関係的であると同時に、個別具体的である人間的現実への接近はこの両者の相克として、両者の間を橋渡しするような方法、すなわち、人々の生活世界における個別具体的な意味づけや心理過程を捉えつつ、人々が社会的、互恵的關係へと向かうプロセスを同時に捉えていくような方法を必要とする。

質的研究における近年の方法論的展開の中で提案されているいくつかの研究手法を重ね合わせることによって対象となる事象に多角的な視座からアプローチしていく「トライアングレーション」（フリック、2011/1995）方略は、上述したようなジレンマに対する方法論的解決を志向する試みの一つとして理解することができよう。ここでの質的研究とは、人々の現実に接近するために普遍的な理論体系ではなく、人々の生きる生活世界での状況に埋め込まれた質的データを重ね合わせていく多様な研究方略（フリック、2011/1995）を指している。

本稿では、こうした志向に重なるものとして、文化心理学的な探求の脈絡を引き継ぎつつ、人々の生活世界における日常実践の分析において人々の生きた「社会的関係」と「具体的個人の視野」との双方を同時に探求していく具体的方法論の検討を進める。そして、この目的を可能にする一つの方法論的提案として本稿では「ナラティブの重奏化」という質的データ分析方略を定義し、この方略の手続きを実際の質的データ分析への適用を通して例解する。

「ナラティブの重奏化」は、相互照射的に分析されるナラティブ間の「一致」に注目することによって人々の生活世界における社会的、互恵的關係の実相を把握すると同時に、ナラティブ間の「相違」を担保することによって人々の個別具体的な主観的視野をも把握可能にする。

また、実践的な意味において「ナラティブの重奏化」の採用はフィールド研究に臨む実践への参加者が、特定の時空間における観察からのみでは十分に捉えることの出来ない実践世界における多様な個別的、社会的意味を捉えることを可能にする。

— 3 — 実践的問題

前節では文化心理学的な探求の脈絡の中での人間的現実へ向けられた方法論における「個別具体性」への接近と「社会的諸関係」への接近との間に敷かれた分水嶺の一例を示し、本研究の理論的な背景と志向を示した。ここまでの議論を整理するならば、本研究の主目的は、複数の主体（共同体も含む）の間に孕まれる視野の相違を、如何に繋ぎ合わせ、新たな社会的、文化的な意味を生成していくか、という問題を巡る実践的探求であると言える。

さて、本節では個の意味と社会的意味との間に生じるジレンマ問題を、今一度我々の生活世界における議論へと引き戻す。ここに示すジレンマは、ある出来事を巡る個的な意味づけが、他者や共同体のそれと異なっている時、社会的合意を擁護して個的な意味を放棄するか、個的な意味を擁護して社会的合意を放棄するか、あるいは、多くの日常的な場面において我々が採用する対話的な手続きによって「相違」と「一致」との二律背反の間に何らかの「折り合い」を見出すか、というジレンマである。先にも示したようにこうしたジレンマへの挑戦は、社会構成主義的アプローチ（ガーゲン、2004/1999）における主要な探求課題の一つである。また、我々の職業的な実践の現場においても日常的に経験されるものである。一つの例を提示しよう。次に示す例は、小学校という教育実践の現場で起こった日常的な出来事の一つである。

休み時間にクラスの5人の子ども達がバスケットの試合をしていた。休み時間が終わり、いち早く教室に戻ってきたユカリが「先生、バスケやってたらケンジがボールを私の顔に投げてきて眼鏡が曲がりました」と訴えてきた。後から戻ったケンジを呼んで事情を聴くと「わざとではありません」と言う。しかしユカリは「明らかに狙った」という。近くにいたユカリの友人は「ケンジはわざと投げた」といい、一方のケンジの友人たちは「ふざけんなよ」と息巻く。「これはユカリとケンジの話だから」と取り巻きの友人達を座らせて二人を前に「わざとにしる、わざとでないに

しろ、結果的にケンジの投げたボールがユカリの顔に当たったわけだね」とケンジに確かめる。「はい、でも狙ってないし、わざとじゃありません」とケンジ。「絶対、わざと」とユカリ。「じゃあ、どうする。これじゃあ二人の話が合わないよ。ユカリはどうして欲しいの?」。[まずケンジにあやまって欲しい]とユカリ。そこでケンジに「わざとでないにしる、顔にボールが当たって、眼鏡が曲がってしまったんだから、それについてはユカリにきちんとあやまるべきだぞ」と諭した。ケンジはしばらく黙ってうつむいていたが、ユカリに「ごめん」と一言。ユカリも黙っているの、[ユカリ、どうなの]と聴くと、不服な表情のままぼそりと「いいよ」という。二人ともいまだ煮え切らない表情を浮かべていたが、クラスの子ども達を待たせるわけにいかないので「よし、授業始めるよ。席について」とその場は切り上げた。

[2012. 4. field notes.]

さて、ここに示したエピソードは、小学校という教育の実践現場において教師が直面した日常の一場面である。この事例において出来事を巡るユカリの意味づけとケンジの意味づけの間には明らかな「相違」が見出される。というのも、ユカリはケンジの行為を「わざと」と意味づけ、ケンジは「わざとではない」と意味づけているからである。そこで教師は「わざととか、わざとではないか」という二人の意味づけの「相違」については一旦問題を保留し、出来事として起こった事実焦点をあて、ケンジにユカリに謝罪するように諭した。結果的に、二人の出来事を巡る意味づけは、個別的な意味づけの上では「相違」を含み込んだまま、社会的には「行為に対する謝罪」というある種の文化的儀礼によって「合意」に至ったもの、として認証されることになった。

このエピソードに示唆されるように、ある出来事を巡る個的な脈絡の中での意味づけが他者のそれと異なっている場合において、それでも尚、他者との間に何らかの意見の一致や、合意を見出そうとする時、我々は自分自身の個的な意味づけにどこまで固執するか、裏返せば、他者の意味づけにどこまで付き合うか、という問いを突きつけられることになる。そしてその結果として多くの日常的場面において我々は、

対話的な手続きの採用によって「相違の上での合意」というアンビバレントな解決を見出すことになる。もちろん時には議論が平行線を辿るというような「相違」に貫かれた帰結や、「相違」の内に他者の意味づけを共感的に受け入れ、自らの経験の糧とするような建設的な「合意」も想定され得るが、いずれにせよここに述べてきたような個人的意味と社会的合意との間に現出する関係的なジレンマは、我々の社会生活に馴染み深いものとして現れてくる。

さて一方で我々の日常には、ある出来事を巡る個人的な脈絡の中での意味づけが、その意味づけ方において偶然にも他者のそれと「一致」している、ということがある。そこでは、「相違の上での合意」というアンビバレントな解決は介在せず、ただ「予期せぬ一致」という様式によって当人と第三者との出来事を巡る意味づけの仕方が結びついている。そして一般的に言うならば、我々はこのような「予期せぬ一致」について意識的になることはあまりない。というのも、ある出来事についての個別的で主観的な意味づけが、何らかの契機によって相互に交流され、そこに見出された「予期せぬ一致」によって結びつき、その出来事を意味づけた当事者の現前に再帰する、という一連の経過は、その多くが日常の連続的経過の中に埋没してしまっており、それらに改めて考察を加える機会が与えられていることはあまりないからである。だが、本研究が探求の焦点を当てるのは、このような経験と経験との間をとり結ぶ「予期せぬ一致」であり、この「予期せぬ一致」を土台として明らかになる人々の「個別具体的性」と「社会的関わり合い」の実相、そしてそこに見出される「関係の編みなおし」の可能性である。

ここに今一度、小学校の現場での実践を通して得られたデータを例示する。ここに示すのは、ヤマモトさん（仮名）と、ナカノさん（仮名）という二人の子どもが綴った7月10日の日記である。

7月10日（火） ヤマモト ユカ

木登りを、20分休みにした。イガラシさんと、ナカノさんと、私でした。ナカノさんと私は、くつをぬいで、はだしで登った。木がつるつるしていて、気持ちよかった。足を洗っていたら、また気持ちよくなった。 [2012. 7. 10. individual diary.]

7月10日（火） ナカノ ハルカ

今日、二十分休みに、ヤマモトさんと、イガラシさんといっしょに、木登りをしました。教室の東側の木に登りました。私とヤマモトさんは、素足です。最後に、足を洗いました。冷たくて、気持ちよかったです。 [2012. 7. 10. individual diary.]

ここに示した日記は、それぞれが家に帰り着いてから一日を振り返って心に残ったことを綴ったものである。従って二人は時間的、空間的に全く別々の場所で7月10日（火）という一日を振り返り、その日の生活の中で印象に残った出来事について意味づけ直している。従って、一日の経過の中からこの出来事を選び出したことは各々において恣意的なものである。出来事を巡る二人の個別的な脈絡の中に位置づけられた「木登り」の経験は、行為、情動において、当人の意識の内に個別具体的なものとして意味づけられる。

一方で二人のナラティブは、互いに知られることなく出来事、登場人物、行為、情動の意味づけにおいて偶然に「一致」している。もしこの「予期せぬ一致」を二人に知らせる機会がなければ、二人はお互いのナラティブの「予期せぬ一致」を発見することはなく、各々のナラティブは、経験の個人的意味づけの履歴の中に埋もれていくだけであろう。

さて、二人のナラティブを併置することによって気づかされることは、「相違の上での合意」というアンビバレントな解決を介在せず、「予期せぬ一致」という様式によって相互に結びついた出来事の意味づけ方である。

先にも示したように当の二人にとってこの経験の「予期せぬ一致」は不可視であり、この一致は提出された日記の読み手である、という立場（教師）において初めて見出されることになる。ここに見出される一致は、「出来事の一致」、「登場人物の一致」、「身体的行為の一致」、「情動的思考の一致」という5つの局面によって特徴づけることができる。

さて本研究ではここに示してきたように、人々が日常生活の中で経過した様々な出来事をナラティブという様式によって意味づけ直した個別具体的な経験を、「予期せぬ一致」に基づいて当人、または他者（第三者）が関係づけ、新たなナラティブとして再構成して

いくことを「ナラティブの重奏化」と呼び、本研究におけるデータ分析の主要なツールとする。この方略は、重奏的に分析されるナラティブ間の「一致」に注目することによって人々の生活世界における社会的、互恵的な関わり合いの実相を明らかにすると同時に、ナラティブ間の「相違」を担保することによって人々の個別具体的な一人称的視野を把握すること企図する。

— 4 —

方法の定義：ナラティブの重奏化

「ナラティブの重奏化」とは、以下の定義によって示される質的データの分析法である。

- ① 生活世界での個別的な経験の脈絡の中で、当人、または他者が行った行為、思考についての語り（ナラティブ）を対象とする。
- ② ①に示した語り（ナラティブ）中で、Aの語り、Bの語りの内容とが「出来事」、「登場人物」、「身体的行為」、「情動的思考」のいずれか、またはいずれも、の局面において「偶然に一致」している。
- ③ ②に示された「予期せぬ一致」（偶然の一致）に、当人、または他者（第三者）が気づき、その一致を関連づけ、新たな語りとして意味づけなおす。

ここに示したように「ナラティブの重奏化」は、異なる個人によって、異なって意味づけられた多様な出来事についてのナラティブを「予期せぬ一致」に基づいて相互照射的に結びつけていく方法である。

重奏的に分析されるナラティブ間の「一致」に注目することによって、単独のナラティブ分析からでは十分に把握することのできないような人々の生活世界における社会的、互恵的な関わり合いの実相を把握することが可能になる。同時に、ナラティブ間の「相違」は人々の体験世界の意味づけを巡る個別的位相を担保する。このことは、一人称としての人々の個別具体的な視野を三人称的な社会的諸関係の中に埋没し得ないものとして把握することを可能にする。

この達成は、人間的現実への文化心理学的アプローチにおける個の意味と社会的意味との間の二元論的ジレンマを解消し、人々の生きた社会的、互恵的な関係の実相と具体的個人の視野との双方を同時に描写し、分析していく方法を具体化する。

人間活動の分析において「社会的関係」や「媒介された行為」を単位として探求を進めてきたアプローチが、当事者としての具体的個人が世界における自らの経験を、どのように感受し、解釈し、意味づけているか、ということへの記述を十分に検討してこなかったのに対し、「ナラティブの重奏化」では、ナラティブアプローチの方略を取り入れることによってこの点を補完する。本稿でいうナラティブとは、日常の生活世界の中で個々人によって意味づけられた多様な経験を、当人または、第三者が言語的な媒介によって表現し直したものを指す（フリック、2011/1995）。

また、ナラティブアプローチの主要な方法であるインタビューを用いて特定の個人の生きられた物語に耳を傾け、研究の探求課題と関連して引き出される参加者の経験世界についての語りの内に個人的、歴史的、文化的、社会的な意味を見出していく方法では十分に捉えることの出来なかった人々の生活世界の中での社会的な関わり合いの脈絡や相互理解へ向けた動的プロセスを「ナラティブの重奏化」では、多様な実践状況に埋め込まれたままのナラティブをデータとし、それらを相互に重ね合わせるという方法の採用によって補完する。日常実践の中に埋め込まれた当事者としての人々の間に交わされた自発的、社会的な会話やナラティブは、その実践が為された脈絡や社会的、文化的な景観を照射する。そして、人々の個別的な経験の履歴として回顧的に意味づけられたナラティブの重ね合わせは語り出された出来事の脈絡に「現実」という意味を付与していく。

最後に、研究メソドロジーとしての「ナラティブの重奏化」の採用は、フィールド研究に臨む実践への参加者が、特定の時空間における定点観察からのみでは十分に捉えることの出来なかった実践世界における多様な個的、社会的な意味を把握可能にする。

— 5 — 分析データ

本研究がフィールドとする実践現場は小学校である。研究のフィールドを小学校に定めた理由は二つある。一つには「ナラティヴの重奏化」によるデータの分析とその効果が、教育という現場において最も密接に実践と結びつき得ると考えられたことである。二つには、筆者自身が小学校の教師であることから、フィールドの当事者という視点を持ちつつ研究に臨むことができることである。本稿で分析するナラティヴデータは子ども達が日々の生活の中で出会った出来事について綴った日記や作文である。日記や作文という様式は、当事者が直面した出来事の経過を、その出来事の中で関わりを持った相手や、その場を共に生きた人々の思考や行為などを含めてひと繋がりストーリーとして再構成したものとして位置づけることができる。日記や作文などのドキュメントデータのこのような特質は、当事者自身が意味づけ直した経験を他者と共有可能にするという点において分析者の個別の経験へのアプローチを助ける（フリック、2011/1995）。

尚、研究における倫理的配慮から本研究で示すデータ中の固有名については全て仮名とし、カタカナで表記することとする。またデータ中の下線は、データの分析において便宜的に筆者が加えたものである。

データ1： いもりのいのち

いもりのいのち タケダ ユウジ

僕は、宿泊学習では4日目くらいまではイモリをとっていた。そのうちに、“底の方を探るととれる”とか、“午後の方が沢山とれる”というようなコツをつかんでみんなで合計24匹とれた朝だった。僕はサカイ君に

「もう逃がそうよ」

と言った。サカイ君は

「嫌だよ」

と言った。それで逃がすのをやめてしまった。

それが間違いだった。

昼になって水そうを見ると、24匹のイモリが死んでいた。(なんでだろう。) そう思い水に手を触

れてみると熱湯だった。(イモリにとってはおそらく.)

僕はイモリにとても可哀想なことをしてしまったと思った。

正直悲しかった。イモリの死体は池に入れた。生きているイモリはその後、ナカタさんが1匹ととっただけだった。

これで農場の池のイモリは絶滅寸前となったかもしれない。だとすると30匹近くのイモリが数匹にまで減ったことになる。もう少し適切な判断ができるよかった。

しかし今度の事は僕にとって、命を考える大切なチャンスとなった。これからはこの経験をもとに生き物を大切に、水の管理などをしっかりとし、生き物を飼ったり、育てたりしていきたい。

[2010. 6. individual composition.]

データ2： イモリ

イモリ サカイ ケンタ

宿泊学習に行ってからあった自由時間にイモリをとった。一日目は3匹、二日目は14匹、三日目は1匹だった。とった時はうれしかったけれどとても悲しい出来事があった。それは二日目の出来事だった。タケダ君が「イモリ逃がそう」と言った時、イモリを逃がしに行ったら何か様子がおかしいと思った。そして水そうの所に行ったらイモリが24匹大量死していた。

死んでいた原因はなんと水が40度以上あがっていたからだ。なぜ水がすごく熱くなっていたかということ、イモリの入った水が日なたにおいてあったからだ。太陽の暑さが冷水を温水にしまったんだなと思った。僕は自分で総合の係としてとてもひどい事をしたと思った。むしろ僕は総合の係として失格だなと思った。本当にかわいそうな事をしてしまった。ぼくは自分を責めつづけた。

僕はその死んでしまったイモリを池の中においてあげた。本当にかわいそうな事をしてしまった。ぼくは自分を責めつづけた。でもそんな事をしてもどうにもならないから池においたイモリをぜんぶ陸に上げてうめてあげた。

それだけど、ナカタさんがたまごもちのイモリをとった。それが全部というよりほとんど生きのびて大きくなれば、またあの池にイモリが復活するなど思った。もう少しいると思うからそのイモリが子孫をつないでほしいなど思った。本当にひどい事をしたなど思った。次はその失敗をしないように採った日にちゃんと逃がしてあげようようにしたいし、それに、もしもとっておきたいな、という時には水そうを日かげにおいて日があたらないようにしてあげたい。とてもショックだった。そのイモリが死んでしまった時の事を気づいた時には一気にそのイモリを採りたくなくなったし、あの池を見たくもなくなった。もう一つの池にはカエルが沢山いた。やっぱりイモリだけでなくゲンゴロウ、コウイムシなどほかの生き物も同じだと思った。この池の生き物が全部死んでしまわないようにできたらいいなど思った。イモリはとてもかわいい生き物だが生き物とは人間も同じだ。もしもずっと40度の気温の中でずっと僕がいたとしたら僕をつかまえた巨人がその場所に僕を入れたのと同じだ。

それを考えると生き物というのは熱すぎてもだめだし冷たすぎてもだめだ。それぞれ生き物というのはその生き物に合った温度で飼わないと、また育てないといけないんだなど思った。それに温度だけではなく環境もその生き物に合った環境でないといけない。たとえばカエルでその事をやってみると体が必ずぬれてないといけない。それにずっと水の中にいるとカエルという生き物は呼吸ができない。だから分類で分けてはいけない。だから前も書いたようにその生き物に合った環境でないといけない。これでまた一つ勉強した。でもひどいことをしたのにかわりはない。これからは、そういうふうにするようにする。本当にひどいことをした。

[2010. 6. individual composition.]

— 6 — 分析と結果

上に示した二つのデータを「ナラティブの重奏化」

によって分析することを通して、この方法の具体的な手続きを例解する。

(1) 定義1に基づく分析

「ナラティブの重奏化」による分析の第一の要件は「生活世界での個別的な経験の脈絡の中で、当人、または他者が行った行為、思考についての語り（ナラティブ）を対象とする」ことである。上述のデータは、いずれも、小学校における宿泊学習として行われた一週間の農場での生活経験を振り返って二人の子どもが綴った作文である。いずれの作文も個別的な視野から自らの経験について語り直しているものであり、その語りにおいて自身と他者とを含み込みつつ、具体的な出来事を巡る状況やその場に居合わせた人々の行為や自身の心情についての記述を含んでいる。

(2) 定義2に基づく分析

分析の第二の要件は、二つのナラティブデータにおいて、出来事の語り手であるタケダ君のナラティブと、サカイ君のナラティブとが「出来事」、「登場人物」、「身体的行為」、「情動的思考」のいずれか、またはいずれもの局面において「予期せぬ一致」に基づいて結びついていることにある。

出来事的一致 「出来事的一致」については、二人のナラティブの共通部分を抽出し、対応づけていくことによって明らかにすることができる。データ中に示した下線が二人のナラティブの共通部分である。二人のナラティブを共通部分によって対応づけていく時、次のようなナラティブを再構成することが可能である。ここに明らかになるのは、いわば、一連の出来事の「現実」としての意味である。

タケダ君とサカイ君という二人の男の子が、宿泊学習でイモリをとっていた。合わせて24匹のイモリをとった。そして24匹とれた日（二日目）、たけだ君の「イモリ逃がそう」という声で二人は水そうへ向かう。そこで24匹のイモリが死んでいる姿を目の当たりにする。水そうの水はとても熱くなっていた。二人はイモリの死骸を池の中に入れる。その後、生きているイモリはナカタさんが1匹とっただけだった。

調査者が人々の生きられた現実を理解することを目的として人々の生活の現場に足を運び、そこに生きる人々に聞き手として関わる時、調査者はその場に生きる人々が語った出来事や物語を当面「本当のこと」として受け止める。言い換えれば、そこで語られたエピソードに「現実」という意味を与えていく。重奏的に分析される複数のナラティブの間に、出来事についての脈絡上の一致が見出される時、その出来事の現実味は、重奏的分析を通してより深いものとして第三者に受け止められることになる。反対に、出来事についての脈絡の中で複数のナラティブの間に齟齬が見出されるならば、各々のナラティブは異なる出来事についてのエピソードとして認識されることになるか、あるいは、齟齬を含む部分の現実味は少なからず損なわれることになる。

登場人物の一致 「ナラティブの重奏化」では個別具体的なナラティブを「予期せぬ一致」に基づいて重ね合わせることによって出来事に現実という意味を与えると同時に、人々の社会的な関わり合いの実相を把握することを目論む。お互いのナラティブの中に具体的な状況や関わりをもった相手、活動における関係対象が登場することによって、その出来事に関わりのあった人々や関係対象が明らかになる。例えば、タケダ君のナラティブの中にサカイ君が登場し、サカイ君のナラティブの中にタケダ君が登場することによって、少なくとも二人が一緒にイモリをとっていたことが明らかになる。さらに二人のナラティブに、イモリ、ナカタさんといった関わり合いの相手や関係対象が登場することから、イモリの死を巡る一連の出来事に関わりのあった人々、つまり「登場人物」が見えてくるのである。このように複数のナラティブにおいて「登場人物の一致」が見出される時、個々のナラティブは相互照射的に、その出来事を巡る社会的関係の実相を示し出すことになる。ここに明らかになるのは、いわば人々の生きた社会的関わり合いの構図である。

行為・情動の一致 タケダ君とサカイ君という二人の少年のナラティブにおける「行為」を辿る時、①イモリをとったこと、②イモリを逃がそうとしたこと、③水槽の水温を確かめたこと、④イモリを埋葬したこと、という少なくとも4つの行為において語りの「一致」が見出される。これは、二人のナラティブの共通部分を抽出し、対応づけていく作業の過程で明らか

になる。また、「情動の一致」については、語りの表現においては個別性の保たれた相違が見られる一方で、その背後には二人ともがイモリの死に直面して、悲しみ、後悔、自責の心情を抱いたことが共通に読み取られる。ここに見出すことのできる行為・情動の一致は、二人の少年に共有された意味の土台を構築する可能性を有している。

(3) 定義3に基づく分析

「ナラティブの重奏化」による分析の最後の要件は、先に例示した二人の少年のナラティブの「予期せぬ一致」(偶然の一致)に、本人、または他者(第三者)が気づき、その一致を関連づけ、新たな語りとして意味づけなおすことにある。この要件は、二つの作文の抽出、併置、そして上述の(2)の分析を通してすでにその半分が満たされたと考えてよい。

残りの半分は、ナラティブの重奏化によって新たに関係づけられたナラティブから、そのナラティブを関連づけた本人、または他者(第三者)がどのように意味を読み取るか、という問題と結びついている。

ナラティブは、我々の生活世界の中の多様な出来事や経験に形を与え、それらに現実という資格を与える。一方で、ナラティブは、それらが受けとられる状況や、語り手、受け手の立場に応じてその視点や有意性の変容する(ブルーナー、2007/2002)。この点については、ナラティブの重奏化による分析の実践的意義として次節で検討することにする。

さて、先に示した二つのナラティブは、それぞれの子どもが小学校の宿泊学習として出かけた一週間の農場での生活を振り返り、作文という様式によってそこでの経験を綴り直したものである。二人は別々に「イモリの死」を巡る出来事を振り返り、それらを個別に自らの経験として語りなおしている。従って、ここに見出されるナラティブの一致は、「予期せぬ一致」として特徴づけられるものであり、この「予期せぬ一致」を見出し得るのは、複数の作文の読み手である第三者(教師)、という立場においてである。尚、一致の外側に位置づく相違、すなわち、個別的な出来事の意味づけ方の相違は、出来事に向けられた各々の少年の個別具体的な視野として、その主観的な個別性を失うことなく保ち続けられることになる。

— 7 — 考察

以上の論考で文化心理学的な探求の脈絡の中に「ナラティブの重奏化」という質的データの分析方法を定義し、定義に基づいて実際の質的データを分析することを通してこの方法の具体的な手続きを例解した。

続く本節では全体的な考察として複数のナラティブデータを「ナラティブの重奏化」によって分析することの実践的な意義を検討する。

ここでは特に教育現場における実践的意義に焦点をあてる。その主たる理由は前節冒頭で言及した通りである。尚、本研究における筆者の立場は、データの分析者であると同時に、小学校の一教師でもある、という特殊性を帯びている。従って、以下に示す考察は、一人の教師という視点から教育の実践現場を眼差し、「ナラティブの重奏化」の実践的意義を考察するものである。

(1) 個別的・社会的現実の把握

「ナラティブの重奏化」による質的データ分析は、教育現場の実践的脈絡に対して二つの意義を示唆する。第一の実践的意義は、第三者（教師）の視点から子どもたちが日々の生活の中で出会った様々な出来事や社会的なやりとり、友だち関係の実際や変化、その中で子ども達を感じていることを把握することができる、という点にある。つまり、研究メソッドとしての「ナラティブの重奏化」の採用は、フィールド研究に臨む実践への参加者が、特定の時空間における定点観察からのみでは十分に捉えることの出来なかった実践世界における多様な個別的、社会的な意味を把握可能にする。学級における教育的営みは、一方では、在籍する子どもたち一人一人の成長や発達へ向けられた教師の働きかけと結びついている。この働きかけを、仮に子どもたちとの具体的な関わり合いを通して、相手の思いや考えの理解につとめ、その発達の可能性に手を差し伸べるという視点から意味づけるならば、個々々々の具体的個人へのアプローチと考えることができる。他方、教師の教育的営みは一人一人の子どもに対してだけではなく、授業や生活を通して活動班、学級、学年という単位に対して、社会的な関係の成長

や発達に向けて働きかける営みとも結びついている。こうした働きかけを個への働きかけに対置して、社会的関係へのアプローチと考えることができよう。

つまり、教育の現場における教師の働きかけは、個を捉え、個の成長、発達に向けて働きかける営みと、社会的な関係を捉え、関係の成長、発達に向けて働きかける営みとが混ざり合っているといえる。ここには、個への働きかけが派生的に含み込む関係への発達の作用と、関係への働きかけが派生的に含み込む個への発達の作用も内在されている。

このような教育の実践現場において、一人一人の子どもの理解とその成長へ向けられた教師の働きかけと、社会的な関係を理解し、その関係の成長へ向けられた教師の働きかけとは、双方共に重要な意味を内在している。このことから、子どもと教師とが日々の生活の中で経過している多様な関係的現実を把握し、意味づけ直していく作業と、その日常の場に生きる一人一人（具体的個人）の個別的なナラティブを受け取り、意味づけ直していく作業との双方を可能にし得る「ナラティブの重奏化」は教育の現場において実践的な意義を有すると考えられるのである。

(2) 関係の紡ぎ直し

第二の意義は、「ナラティブの重奏化」によって得られたナラティブ相互の「予期せぬ一致」を、当の語り手に再帰していくことを通して展開する実践的可能性である。この可能性は、人々が共に新たな意味構築のプロセスに向かっていくための関係的素地の醸成と結びついている。「ナラティブの重奏化」によって、そのままでは結びつけられることのなかった複数のナラティブが「予期せぬ一致」という形で関係づけられ、語り手たちに再帰される時、複数の語り手たちの間には親近感とも呼ぶべき情動が生成される。

それまで当人たちにとっては不可視であった出来事を巡る個別的な意味づけの一致が明らかになる時、そこには「一緒だね」、「あなたも書いたの」という予期せぬ一致への驚きと共に、「関係の紡ぎ直し」ともいえるべき局面が見出される。つまり、これから私たちは共有可能な意味を土台として、共に新たな意味構築のプロセスに参加していける、という関係的な結びつきが醸成され得るのである。

そもそも、学校教育の実践的脈絡において子ども達

に共通体験の場を準備することの重要性が主張されることは稀なことではない。だがしかし、その理論的な根拠は思いのほか明白ではない。教育的営みにとって、共に新たな意味構築プロセスに参加していきける、という関係的素地は実践的に重要な意味を有している。その前提として共有された意味を媒介とする「関係の紡ぎ直し」は一つの重要なキーワードになり得るのではないか。

本稿の冒頭で例示した「木登り」のナラティブの予期せぬ一致をヤマモトさんとナカノさんに伝えた時、二人の間には「え～！あなたも書いたの」という嬉しさの滲む驚きがあった。さらに、この予期せぬ一致を「なんかうれしい」、「また一緒にしよう」という言葉で振り返った。

相互いに語り出された出来事の脈絡の中に共有可能な価値を発見し、互いに味わい合うことが出来る時、本研究はそこに経験と経験との間の「予期せぬ一致」をきっかけとした「関係の紡ぎ直し」の可能性を見出す。

経験の再構成としての個別的なナラティブの間の「予期せぬ一致」を契機として親近感を伴って生成される当事者間の意味の共有を「関係の紡ぎ直し」と呼ぶならば、この「関係の紡ぎ直し」は、当事者間に共に新たな意味構築のプロセスに参加していきけるという関係的素地の醸成を準備する。

先述した「イモリの死」をめぐる予期せぬ一致をタケダ君と、サカイ君に伝えた時、彼らも「え。サカイも書いたの」という予期せぬ一致への驚きと共に、「やっぱりタケダも書いたか。あの時はなあ」と二人でその共有された出来事の意味を確かめあっているようであった。

さて、予期せぬ一致を契機として当事者間に再認識される共有された意味の土台に、当事者ではない第三者がアクセスすることは困難である。体験者ではない第三者にとって、意味づけられた出来事そのものは不可視だからである。従って第三者に行い得る実践的な寄与は、個別具体的なナラティブの間に予期せぬ一致を見出し、それらを出来事の当事者に再帰していくことである。そして、この再帰を通して当事者の間に共有された意味を土台とした「関係の紡ぎ直し」の機会を提供し、共に新たな意味構築のプロセスに参加していきける、という関係的素地の醸成を目論むことである。

ある出来事についての個別的な脈絡の中での意味づけが、他者のそれと異なっていることから出発し、そこに何らかの共有可能な意味の土台を築き上げようとする時、多くの日常的場面において我々は対話的なプロセスを志向する。そして、「相違の上での合意」というアンビバレントな解決を見出すところから共有可能な意味の土台を構築していかなければならない(ガーゲン、2004/1999)。一方、「ナラティブの重奏化」によって見出される「予期せぬ一致」に基づく共有可能な意味の土台は、関係づけられた主体の間に親近感とも呼ぶべき情動を伴って「関係の紡ぎ直し」の機会を提供し、共に新たな意味構築のプロセスに参加していきける、という関係的素地の醸成を可能にしていくと考えられる。

— 8 — 総括

本稿は、「ナラティブの重奏化」という質的データの分析方法を定義し、その定義に基づいて実際の質的データを分析することを通して、この方法の具体的な手続きを例解することを目的とした。「ナラティブの重奏化」は、人々が日常生活の中で直面した様々な出来事をナラティブという様式によって意味づけ直した個別具体的な経験を、「予期せぬ一致」という条件に基づいて当人、または他者(第三者)が関係づけ、新たなナラティブとして意味づけ直していく質的データの分析方法である。

この方法によるデータ分析は、ある出来事を生きた人々の社会的な関わり合いの実相と、経験の語り手としての具体的個人の視野との双方を同時に捉え、吟味することを可能にする。こうした方法論上の特性は、個を捉え、個の成長、発達に向けて働きかける営みと、社会的な関係を捉え、関係の成長、発達に向けて働きかける営みとが混淆する教育の実践現場において実践的な意義を有し得ることが示唆された。

また、「予期せぬ一致」に基づいて見出される経験と経験との間の共有された意味の当事者への再帰は、ナラティブによって関係づけられた当事者間に親近感を伴う「関係の紡ぎ直し」の機会を提供し、新たな意味構築プロセスへと向けられた関係的な素地を醸成す

る可能性を有することが示唆された。

なお、本稿では人々によって語り出される多様なナラティブの中から時間的、空間的に異なる出来事についてのナラティブの間に「予期せぬ一致」が見出された場合の可能性について十分な吟味を行っていない。

人々の生活世界に溢れる多様な出来事についての複数のナラティブの間に見出し得る「予期せぬ一致」と「共有可能な価値」とには多様な結びつきの可能性

がある。従って、時間的、空間的に異なる出来事についての複数のナラティブの間に「予期せぬ一致」や「共有可能な価値」が見出される可能性も十分に考えられる。そして、「ナラティブの重奏化」によって結びつけられた複数の語り手が互いに「共有可能な意味」を味わい合うことが出来るならば、そこにも経験と経験との間の「予期せぬ一致」をきっかけとした「関係の紡ぎ直し」の可能性が拓かれることになるだろう。

引用文献

- ブルーナー、J. S. (1999). 意味の復権——フォークサイコロジに向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子、訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bruner, Jerome S. (1990). *Acts of meaning*. Mass: Harvard University Press.)
- ブルーナー、J. S. (2007). ストーリーの心理学——法・文学・生をむすぶ (岡本夏木・吉村啓子・添田久美子、訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bruner, Jerome S. (2002). *Making stories*. Mass.: Harvard University Press.)
- コール、M. (2002). 文化心理学——発達・認知・活動への文化—歴史的アプローチ (天野清、訳). 東京: 新曜社. (Cole, Michael. (1996). *Cultural Psychology: A once and future discipline*. The Belknap press of Harvard University Press.)
- デューイ、J. (2004). 経験と教育 (市村尚久、訳). 東京: 講談社. (Dewey, John. (1938). *Experience and education*. The Macmillan Company.)
- フリック、U. (2011). 質的研究入門——「人間の科学」のための方法論 (小田博志・春日常・山本則子・宮地尚子、訳). 東京: 春秋社. (Flick, Uwe. (1995). *Qualitative sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Verlag GmbH.)
- ガーゲン、K. (2004). あなたへの社会構成主義 (東村知子、訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage publications.)
- Lave, Jean., & Wenger, Etienne. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. NY.: Cambridge University Press. 佐伯胖、訳. (1993). 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加. 東京: 産業図書.
- Rogoff, Barbara., & Lave, Jean. Eds. (1984). *Everyday cognition: Its Development in social context*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- シュッツ、A. (1980). 文化人類学業書 現象学的社会学 (森川眞規雄・浜日出夫、訳). 東京: 紀伊国屋書店. (Schutz, Alfred. (1970). *On phenomenology and social relations*. Helmut, Wagner (Ed). Chicago university press.)
- ワーチ、J. V. (2004). 新装版 心の声——媒介された行為への社会文化的アプローチ (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子、訳). 東京: 福村出版. (Wertsch, James V. (1991). *Voices of the mind: A Sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)